



追悼 鶴木 眞 先生



鶴木眞先生という個性

山本信人

2015年7月15日、鶴木眞先生が逝去された。鶴木先生の訃報に接した際、過去数年来体調を煩っていらっしやっただので、とうとうその時がきたかという不思議な感覚があった。強烈な個性をもつ研究者が一人世を去られたという寂しさがあった。

鶴木先生は1942年11月2日、東京にお生まれになった。武蔵中学校・高等学校を卒業後、慶應義塾大学法学部政治学科に進学。1965年に同法学部を卒業とともに、大学院法学研究科へ進学。67年からは法学部助手となられ、70年に専任講師、73年に助教授、79年に教授と昇進なさった。1992年に慶應義塾大学から東京大学新聞研究所（同年社会情報研究所と改称）教授に転職なさるまで、25年間慶應義塾大学法学部で教鞭を執られた。2002年には、『情報政治学』（三嶺書房）にて慶應義塾大学から法学博士号を取得している。

東京大学在職中の2002年から鶴木先生は十文字学園女子大学副学長を兼任された。2003年に東京大学を定年で退かれると東京大学名誉教授となり、十文字学園女子大学・同短期大学学長となられ、同職を2007年まで務められた。そして2007年から13年は松山大学人文学部教授となり、東京と松山を往復する生活を送られていた。

この間、鶴木先生は各種の公的団体での要職をこなされた。2003年から05年の2年間は日本マス・コミュニケーション学会会長、1998年には日本警察政策学会の創設に携わり爾来理事、そして同学会内にテロ対策部会を創設、2002年には国際医療予防学会の常任顧問、財団法人村井順記念奨学財団理事などを歴任された。

鶴木先生の研究は時代を先取りしていた。鶴木先生の研究関心は、マイノリティーの政治意識や、サイバーテロ、テロリズムと情報政策、社会安全と情報政策であった。中東安全保障、テロ対策、国際コミュニケーションの研究分野では、鶴木先生はまさに第一人者であった。こうした鶴木先生の研究関心は、その著書、編著書、翻訳書に明確に反映されている。単著には、『日系アメリカ人』（講談社現代新書、1976年）、『パレスチナとアラブ人』（慶應通信、1981年）、『パレスチナ問題入門』（ティビーエス・ブリタニカ、1982年）、『情報政治学』（三嶺書房、2002年）がある。編著書としては、『真実のイスラエル』（同友館、1993年）、『はじめて学ぶ社会情報論』（三嶺書房、1995年）、『メディアと情報のマトリックス』（弘文堂、1995年）、『客観報道—もう一つのジャーナリズム論』（成文堂、1999年）、『コミュニケーションの政治学』（慶應義塾大学出版会、2003年）がある。

鶴木先生は、メディア・コミュニケーション研究所の前身である新聞研究所の修了生でもある。1962年から65年の3年間、鶴木先生は新聞研究所で、法学部教授でもあられた生田正輝先生などに師事した。法学部教授であった1985年から91年度は、新聞研究所の研究会で「基礎理論」をご担当になられた。したがって、鶴木先生は法学部と新聞研究所の2か所で研究会をご担当になり、後進の教育に携わったことになる。慶應義塾大学法学部教授の大石裕氏、法政大学教授の藤田真文氏など、日本マス・コミュニケーション学会を支え、学問的な支柱となっている研究者は枚挙にいとまない。また東京大学での教え子には、東京大学准教授の池内恵氏や日本大学教授の福田充氏など、中東およびイスラーム研

究者やテロリズム研究者がいる。

鶴木先生とのほくとの個人的な関係は短い。思い出といえば、2006年6月に関西大学で開催された日本マス・コミュニケーション学会春季大会がある。シンポジウムでナショナリズムとイスラームに関するほくの拙い報告に対して、いともたってもいられなくなったのであろう鶴木先生はフロアーから批判的かつ建設的なコメントをしてくださった。また、2011年10月にほくがメディア・コミュニケーション研究所の所長に就任してからというもの、研究所の行事でお目にかかるたびに鶴木先生から声をかけてくださった。研究所の国際化という無謀な目標を掲げた門外漢の所長をとにかく励ましてくださる、鶴木先生の繊細なお心遣いにはいつも恐縮するばかりであった。鶴木先生の後進に対する熱い指導と気遣いを思い出す。

じつは鶴木先生とはひよんなつながりがある。ほくの恩師である松本三郎先生のご長女が、政治学科で鶴木研究会に所属していた。豪快な鶴木先生と大らかな松本先生とは好対照であり、端からはそれほど親密にはみえなかったであろうが、じつはそんなことはなかった。いまから思い起こすと、そのような恩師をとおしての人間関係もあって、鶴木先生はほくのことを気にかけてくださったのであろう。

この追悼文を記しながら、鶴木先生の最後の学術論文となった「マスメディアと国際テロリズムの危機管理」(『法学研究』86巻7号、2013年7月、191-215頁)を改めて読み返してみた。病魔と闘いながら渾身の思いを込めて執筆された本論文は、まさに鶴木先生の研究を集大成した内容である。本論文は、鶴木先生の恩師であられた生田正輝先生の追悼記念論文集に寄稿されたものである。ここに義理と人情に溢れる鶴木先生の生きざまが凝縮されている。

鶴木先生からの直接の指導を受けることはかなわなくなったが、メディア・コミュニケーション研究所がジャーナリズムとメディア研究の本質を見失わずに、国際化の道をも突き進んでいく姿を、鶴木先生は見守り続けてくださると信じている。鶴木先生のご冥福をお祈りします。

山本信人 (メディア・コミュニケーション研究所長、法学部教授)



追悼の辞

大石 裕

1975年に法学部政治学科に入学した私は、翌76年に鶴木眞研究会に所属することになった。当時、政治学科の研究会は2年次から開講されていた。留学帰りの鶴木先生は、『日系アメリカ人』（講談社現代新書、1976年）を出版した。日米社会の境界の中で様々な葛藤を経験しながら、社会的上昇を果たした日系アメリカ人に関する留学中の研究成果がこの本であった。その影響もあり、研究会で輪読していたのは、マス・コミュニケーション、ジャーナリズム関連ではなく、主にアイデンティティ、あるいは政治的社会化に関する文献であった。そのことに不満を持った私は、その思いを先生にぶつけてみたが、軽くいなされ、聞き入れられることはなかった。代わりに、自主ゼミで、要するにゼミ生だけでジャーナリズムの本を読むことをすすめられた。

今思うと、この対応の中に鶴木先生の教育者、研究者としての姿勢が凝縮されていた。当時の日本のジャーナリズム論の主流は、ニュースの生産過程を研究するというよりも、新聞やテレビを批判することが中心であった。商業主義と記者クラブに対する批判ばかりと言っても過言ではなかった。優れたジャーナリズム機能を有する（と思われていた）、ニューヨーク・タイムズやBBCなどと比較し、日本のジャーナリズムの現状を嘆くというのが常套手段であった。ジャーナリズム論のそうした状況を横目にしながら、「この種の、あるいはこのレベルの本は、研究会で読む必要はない、読むべきではない」と先生は考えていたのであろう。たんなる批判を行うことにとどまらず、そうした状況が継続してきた要因に関して、体系だった思想、理論を用いて経験的に分析する、それが研究だというメッセージを先生は発していた。

しかし、そのことだけでは鶴木先生の一面しか見ていないとも言える。先生は面白いと思ったテーマを見つけると、それに向かって直線的に向かう研究者であった。しかも、関心は一か所にとどまらない。多くの海外経験を積むことで、国際社会にその眼は向けられていた。世界の火薬庫と言われた（言われる）中東地域、鶴木先生はイスラエルに二度留学し、現地調査を行っている。社会的コミュニケーションという、まさに「広義の」コミュニケーションの観点から、その歴史も含めイスラエル社会の分析を行い、その成果は『パレスチナとアラブ人』（慶應義塾大学出版会、1981年）、『パレスチナ問題入門』（TBSブリタニカ、1982年）として結実した。その後も先生は、東南アジアや南米などで精力的にフィールド調査を行い続けた。その当時の先生の関心は、内向き、かつ国際情勢を固定的な視点で報道する日本のメディアやジャーナリズムにはなかった。

先生はその後、慶應義塾大学を離れ、東京大学、十文字学園女子大学（学長）、松山大学に勤務することになった。学会関連の活動としては、日本マス・コミュニケーション学会と警察政策学会で会長を務められた。そうした激務の合間を縫って、社会的コミュニケーション、そして国際コミュニケーションの観点から執筆した論文をまとめられ、『情報政治学』（三嶺書房、2002年）を刊行し、この本によって博士学位（法学、慶應義塾大学）を取得された。

鶴木先生とは40年近く、公私にわたって「濃密」なお付き合いをさせていただいた。しかし、前述したフィールド調査をはじめ、先生と共同研究を行う機会は実はそれほど多くなかった。様々な局面で厳しい助言をいただくことはあったが、私の「研究・学問の自由」は完全に認めて下さっていた。私が権力論や社会運動論に関心を抱いても、じっと見守ってくださった。私が本を出版するたびに「頑張ったね」という言葉をくださり、役職に就くと心からお祝いして下さった。本当に思い出は尽きない。先生と何度もご一緒させていただいた有楽町のレストランで牡蠣を食べ、ワインを飲んでいると、あの笑顔がふと浮かんでくる。鶴木先生、ありがとうございました。

大石 裕（慶應義塾大学法学部教授）



「追悼」鶴木眞さん逝く

瀬下英雄

鶴木さんの大学人としての多くの功績については多くの方がこの追悼録にお書きになっておられると思う。そこで、ここでは私と鶴木さんの個人的な交友を中心に綴らせて頂いた。

今年（2015年）7月初旬、私はいつものように鶴木さんの携帯電話番号をタッチした。すると女性の声で「鶴木です」という。鶴木さんは東京・有明の癌センターで抗がん剤治療を受けておられ治療のスケジュールに合わせて入退院をいわば日常的に繰り返しておられたので、入院先の鶴木さんと携帯電話で話すという事はよくあった。だが電話に別の人、今回のように奥様が出てこられるという事はなかった。「今回は（病院から）出られないかもしれない」との趣旨を仰った様に記憶している。それから間もなく、7月15日未明、鶴木さんは72歳の人生を終えられた。

「僕は余命あと半年と医者に言われた」と鶴木さんが私に淡々と話されたのは亡くなるより一年は前だったかと思う。だが、その後の生活ぶりは変わらなかった。私も誘われて参加する事になった「テロ安保警察学会」（外務省、防衛省、大学の関係者の集まり）では月に一回お会いし、夕方 会が終わると二人で国際政治を始め色々な事を議論した。その時 鶴木さんは私の心配をよそにビール そして ウイスキーの水割りを飲んだ。東京・銀座の交詢社でも度々食事をしたが、そこでも健啖ぶりを見せると同時にお酒も楽しんだ。私は内心ヒヤヒヤしながらも取敢て強く止める事はしなかった。又、確か今年（2015年）に入って間もなく、鶴木さんから「テロ安保警察学会の会長を引き受けて欲しいと言われた」と相談を受けた。私は「おやりになったらいいですよ」と促した。私は、勿論 医学の専門家ではないが「余命あと半年」をぶっ飛ばすには鶴木さんに新しい職責に向かう気力を持ってもらう事も一つと信じた。だがその甲斐もなく間もなく鶴木さんは帰らぬ人となった。葬儀の席で会長の職責を急遽、鶴木さんから引き継いだという方から「吃驚した」と話しかけられた。私は、「実は」とお話ししたあとお詫びの言葉を伝えが無念の思いであった。

さて、私と鶴木さんとは慶應義塾大学法学部政治学科の後輩と先輩という関係だった。私は1966年（昭和41年）に卒業してNHKへ。鶴木さんは一年前、卒業と同時に学究の道へ進まれた。当時の二人の接点が新聞研究所（現メディア・コミュニケーション研究所）だった。そして二人が再び巡りあって本格的な付き合いをする様になったのは、多分、2000年頃新聞研究所の卒業生の会「綱町三田会」の年に一度の総会の席であった様に思う。鶴木さんは十文字学園女子大学の学長などを歴任されており、私はNHKを退職、その頃TVの世界を席卷し始めたデジタル放送の推進に当たる組織を預かる立場だった。やがて、私が綱町三田会の代表幹事をお引き受けした事もあって二人の接点は度々となり、お付き合いは密になっていった。

よく知られている様に、鶴木さんは長い学究生活を通して数多くの研究論文、著書を著しておられたが、綱町三田会が2011年にスタートさせた月刊の電子版ジャーナル誌「メッセージ@pen」（message-at-pen.com スマホ版）にご寄稿をお願いしたところ、快く引き受けてくださった。私たち編集部のお願いは中東問題についてだった。鶴木さんは若い時代にエルサレムのヘブライ大学に留学された経験をお持ちで、先ず、「1973年・第4次中東戦争体験記」を2013年10月号から8回に分けて連載して頂いた。又、特に「IS」について2014年10月号から3回書いて頂いた。そして、亡くなる直前、2015年6月号の「不思議な組織“イスラーム国”モヤモヤ感の不気味さ」が絶筆となった。イスラーム国問題ではテロ安保警察学会でも鶴木さんと様々な議論をした。特にある時 鶴木さんの東大教授時代の教子でイスラム問題のエキスパート池内恵氏を迎えての議論は忘れられない。テロとの闘いという表面的な捉え方だけではなく、オスマン帝国時代から現代に至るまでの中東地域の歴史、イスラム教の真意をも見据えた深い洞察力にもとづく示唆に富む指摘が際立っていた。イスラム問題は益々混迷を深めているが、今や鶴木さんと議論をする刺戟的かつ知的な楽しみが失われてしまい寂しい限りだ。ご冥福をお祈りしたい。

(2015年12月20日)

瀬下英雄（綱町三田会代表幹事）